



地滑りで庭が陥没した住宅。家屋も傾き、不自由な生活を強いられている一仙台市青葉区折立5丁目

シートをかけた家も自然に北側へと引っ張られまなじょうになっている。

改修費の補助制度なく

仙台市によると、被災流入人口の増加に対応する住宅危険度判定を実施したため、北部や西部の丘陵地帯で次々と宅地造成とされたのは868件、「要注意」を含めると2078件に上る。多くが、1960～70年代にかけて整備された住宅団地。市内では当時

斜面に盛り土して造った宅地は平野部に比べて地盤が緩く、地震による強い揺れで地滑りを起こしやすい。今回の震災で

は、盛り土のほか、湿地を埋め立てて整備した住宅団地の多くで被害が出ているという。

一方、利用できる支援制度はほとんどないのが現状で、都市整備局は「人工の斜面は自然の崖度と異なり、国の補助対応」

原則所有者の負担。ただ、被害に遭った大半が高齢者で、改修費の負担はことのほか大きい。市は「今回の宅地被害は所有者が対処できる範囲を超えている」として、国に公的支援制度の創設を求めている。

祭りが始まり、多くの家族連れが色鮮やかなシャクヤクを楽しんだ。満開は9日ごろの見通し。園内には赤や白、ピンクのシャクヤク約1万株が咲き誇る。香りもよく素晴らしいと話すのは、仙台市若林区の広告業中村敬子さん(62)。震災で

被災地支援プロジェクト「ふらっとーほく」発起人

松島 宏佑さん(24)

4月上旬に被災地支援プロジェクト「ふらっとーほく」を発足させ、県外ボランティア向けに遠く山田温泉蔵王町の宿を提供している。狙いは、

手伝いたい」という意欲。月2日に県内入りした。はある。そういう人も参加支援物資を届けるなど追加できる仕組みをつくらうと思った。

「東日本大震災以降、地元の温泉宿はキャンセルしていった」

「友人を通じて、蔵王

協力を得て、今の仕組みを実現した」

「評判はどうか」

利用者100人以上

「参加者には『寝袋を持ってきたのに、温泉に入れるなんて驚いた』とやっついて、なじみが深い活動拠点を巨理町に

宿を提供 善意後押し

ルが相次ぎ、自宅待機の町。遠く山田温泉の宿から00人以上。リピーター従業員もいると聞いた。『営業再開までに何か手もいる』

1人1泊2000円(素泊まり)の料金だが、少しでも収入につなげ、さた宿の支配人と交渉し、は懐疑的だったが、参加

「宿は既に3カ所を利用させてもらった。最初一人一人の生活があったと思うとつらくなった」

「県南沿岸部の被害も大きかった。多くの県外ボランティアが三陸沿岸に向かう中、こちらにも目を向けてもらいたい」



設立に関わったカフェで、店主と談笑する松島さん(巨理町堀の内)

心だった」

「他の活動は、」

カフェ設け交流

「5月中旬、手作り料理を提供するカフェを町内に設けた。『被災者の交流の場を』という地元主婦の思いを実現させた。被災者だけでなく、県内外のボランティア参加者も輪に加わり、地域みが続けた」

「ボランティア参加者も輪に加わり、地域みが続けた」

「ボランティア参加者も輪に加わり、地域みが続けた」

「ボランティア参加者も輪に加わり、地域みが続けた」

助け合う力 大震災とボランティア

顧客の開拓にも

「ボランティア希望者の中には、テント泊や車中泊が体力的にきつい人もいる。それでも『何か

まつしま・こうすけ 白石市出身。東京工大卒。2010年5月、島根県海士(あま)町の街づくり支援会社「巡(めぐり)の環(わ)」に入社。社員として、離島への移住促進などに取り組む。

(聞き手は馬場崇)